

ヘリ観測による三宅島2000年カルデラの様子

＜川邊 禎久・中野 俊・東宮 昭彦・伊藤 順一＞



1. 西上空から見た三宅島2000年カルデラ全景。三宅島2000年カルデラは、径約1.7km、深さ約450m。カルデラ底南縁に大量の火山ガスを噴出する主火口がある(2001年12月26日 中野撮影)。



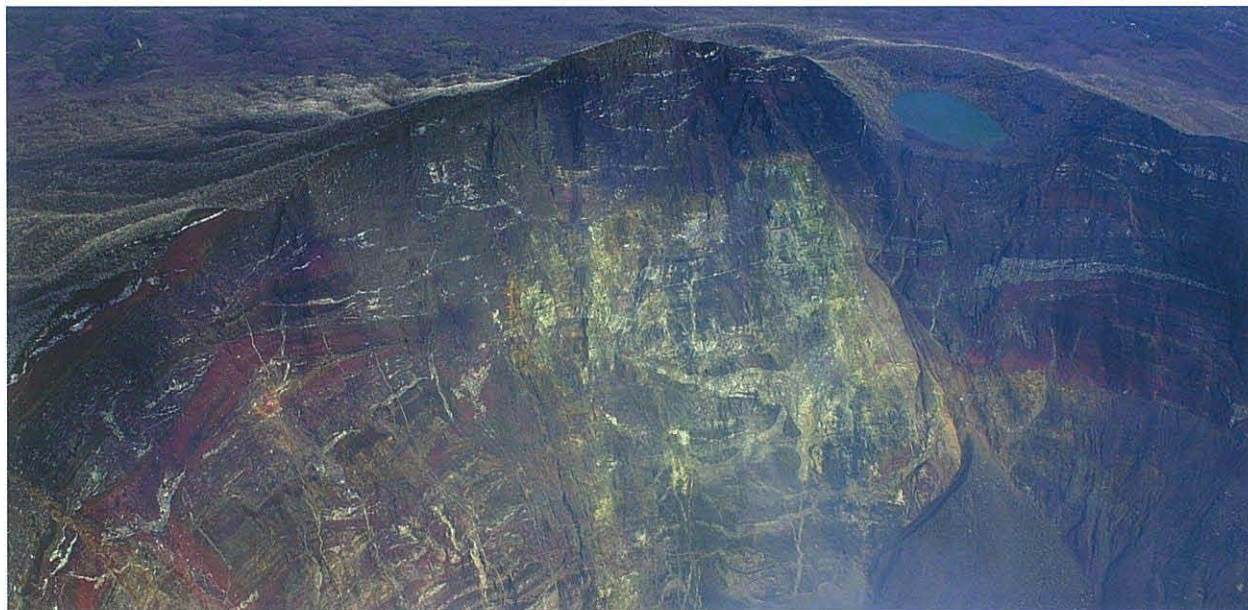
2. 北から見た主火口と噴気列。比高200mほどの火砕丘が、南カルデラ壁に寄りかかるように成長している。主火口の大きさは長径約400m、短径約300m。主火口からは西北西に伸びる噴気列、北および北北東側にも谷沿いの噴気帯がある(2002年2月14日 川邊撮影)。



3. 西から見た主火口拡大写真。主火口は北側火口と南側火口に分けられ、北側火口の火口底は浅く、高温の火山ガスを噴出する噴気孔が中央に見える。また周辺の噴気帯には黄色い硫黄が付着しているのが見える(2001年7月8日 川邊撮影)。



4. カルデラ底の池、水たまり。左に茶色(新北池)中央に灰色、右側に黒色(黒池)池が見える。水の色は、流れこむ土砂やガス成分などが溶け込んだ水の流入などによって異なっているものと思われる。特に右側の“黒池”はよく目立ち、その色から溶岩流と誤認されたことがあった(2002年4月18日 川邊撮影)。



5. 北カルデラ壁。主に降下火砕物、溶岩流ならびにそれらを切る岩脈、貫入岩からなる主成層火山の断面。画面左中央には火砕丘断面が見える(2001年11月14日 川邊撮影)。



6. 南海上から見た三宅島。冬の北西風に流されて噴煙が南東方向に流されている。薄い青白色の火山ガスミストが、地表に沿って坪田-三宅島空港付近に流れ下っているようすがわかる(2002年2月27日 伊藤撮影)。



7. それまで別フライトで行われていたCOSPECによる二酸化硫黄ガス観測も、2001年11月から火口観測と同じフライトで行うようになった。水色の機械がCOSPEC本体。ドアを開けてセンサー部分を機外に出して観測する(2002年2月6日 東宮撮影)。



8. スオウ穴下の崖錐の成長比較。左は2000年11月8日撮影、右は2002年2月14日撮影。崖錐が大きく成長している。左の写真にある池は、2001年11月末-12月初旬に崩落物で埋め立てられた(いずれも川邊撮影)。